

# 残像 三浦綾子



# 残像

三浦綾子

三浦綾子の残像

9207.02

集英社

# 残像

定価 六〇〇円

一九七三年三月二十五日 初版印刷  
一九七三年三月三十日 初版発行

著者 三浦綾子

装幀者 中西清治

発行者 陶山巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇

郵便番号 一〇〇一

電話 東京(285)六一一一

振替 東京 一五六五三

印刷所 図書印刷株式会社

著者との了解により検印を  
廃止します。

目

次

女の影	七
壁と鏡	三
風貌	五
脅迫者	七
節分の日	九
ユー・ターン	一〇三
点検	一三
文学碑	一三
アトリエ	一五
衝立	一七

石狩河口

一八四

トロイメライ

一九〇

大沼

二〇三

水輪

二〇九

罰

二一八

距離

二三四

積丹半島

二五三

盆提灯

二六六

バックミュージック

二七九

相剋

二八九



残  
像

——愛なくばすべてはむなしきものを——





## 女の影

真木弘子が、その女性西井紀美子を見たのは、その日が最初で最後であった。

日暮には少し間があったが、弘子は二階の自分の部屋のカーテンを閉めようとして、降る雪に目をとめた。羽毛のように軽い雪が、漂うようにゆっくりと、しかし次々と地に降ってくる。長いまつ毛を上げて、弘子は空を見あげた。灰色の、低く垂れこめた空の、どこから雪は降ってくるのだろう。雪は、すぐ軒先のあたりで、湧き出るように現われて見えるのだ。

昨日までは青かった向いの草原や笹藪も、今日はすっかり白い雪に覆われている。笹藪の右隣の広い空地に疎らに立っているヤチタモヤクルミの木、そしてナラの木立も、枝々に雪をのせて日本画のように美しい。

真木弘子の家は、札幌市手稲宮ノ沢にあった。この弘子の家のあたりから、遠く石狩の野に向ってなだらかな斜面が北にひらけ、限りなく家並がつづいていた。いつもは遠くまで見えるその家並が、今日は降る雪の中にかすんで、二百メートル先もおぼろである。

まだ十一月、この雪は二、三日で融けるだろうと思

ながら、弘子はふと家の前の道に目をやった。茶と白のチェックの半オーバーを着た、グレイのパンタロンスターの若い女性が、妙におずおずと真木家に近よって来るのが、窓下のナナカマドの梢越しに見えた。手には小さなバッグを持っただけのその女の姿が、なぜか弘子の心をひいた。女は門に近づくと、雪がかかっているのか、その門標を黒い手袋をはいた手でなでた。通りから八メートル程引っこんだ真木家の玄関を、女はのぞきこむようにしてから、やはりおずおずと、庭の間の道を入ってくるのが見えた。が、ふと女は立ちどまった。立ちどまって上を見た女の顔が、二階から見おろしている弘子の顔と合った。そのとたん、なぜか女は顔をそむけた。と思うと、くるりと背を向け、さっさと門を出て隣家のほうへ曲って行った。

(変な人だわ)

確かに女は、この真木家を訪ねてきたにちがいない。それなのに、なぜ自分の顔を見て、逃げるように帰って行ったのだろう。もしかしたら、新米の生命保険か化粧品セールスかも知れない。いや、あれはセールスではないか。門標を確かめてから、門の中に入ってきたではないか。一体わが家の、誰に用事があったのだろう。弘子は頭をかしげながら、水玉模様のエプロンをつけて階下に降りて行った。

「今日はおでんですから、何もすることはしないのよ」

リビングキッチンに降りて行った弘子に、母親の勝江は背筋を大きく伸ばして、自分の肩を叩きながらいった。

「ああ、そうだったわね」

今日は日曜日で、朝のうちに母に手伝って、おでんの煮込みの用意をしたのだった。十二畳の居間には、茶色のソファが、敷きつめられたグリーンのカートケットの上に重々しく置かれてある。父親の洋吉は、カラーテレビの相撲に目をやっていたまゝ。

「ほう、今夜はおでんか」

と、いつものように機嫌のよい声でいった。少し背は丸くなったが、髪は黒々としていて、顔の色つやもいい。洋吉は、五十五歳という年齢より、五つ六つは若く見えた。三つ年下の勝江のほうに、びんに白髪が見え、夫より少し大柄なせいも、時折年上に見られていた。

「ね、お母さん」

いいかけて弘子は口を閉じた。妙な若い女性が、家に入りかけて途中から帰っていったと告げたとしても、母の勝江は何の関心も示さないにちがいない。勝江は、テレビや新聞で残酷な殺人事件や、大きな飛行機事故を見たり読んだりしてさえ、少しも驚かず、同情も示さない女だった。家事には熱心で、料理も上手だった。花なども、いつも見事に活けこんではいるが、何か一つ欠けたものが母にはあると、常々弘子は思っていた。

やがて、夕食の時間になり、弘子に呼ばれて、弘子の兄たち、栄介と不二夫が二階から降りてきた。栄介は食卓にすわると、和服の袖からウイスキーの角ビンを出して、自分の目の前においた。ちらりとその角ビンに目をやった洋吉は、鼻の頭をちよつとこすって、手酌で銚子を盃に傾けた。

「おいしいね、この大根」

不二夫が素直に声をあげた。再び洋吉が鼻をこすった。これが洋吉のいらいらした時か、不満な時の癖であったことに気づいているのは、繊細な次男の不二夫一人であった。他の人間はみな、洋吉という人間はいつも機嫌がいいと、決めこんでいるようであった。

「そうお。不二夫は一番味がわかるわね」

料理をほめられた時だけは、さすがに勝江の無表情な顔が、僅かにほころぶのだ。

「なあに、おでんなんか、馬鹿でも作れるさ」

グラスに氷を入れながら、栄介は鼻先で笑った。もう、そんな栄介の言葉に驚くものは、誰もいなかった。「ダシさえよければ、あとはとろ火で、一日でも二日でも、時間をかけて煮ればいいだけの話だろう」

「ほう、栄介は男のくせに、料理のことに詳しいんだね。しかしねえ、栄介。お母さんの作るおでんには、心がこもっているからねえ」

洋吉の語調に、弘子はいらいらした。

（お父さんがいけないんだわ。何も栄介さんの機嫌をとることなんか、ないのに）

四十になるかならぬうちに、中学校長になった洋吉は、いつも事なかれ主義であった。わが家に口論さえなければ、それが無事であり、平和であると思ひこんでいる父を、弘子は安手な教育者だと、内心不満に思っていた。この家では、真剣な対話も、心暖まる対話も、ほとんどないのだ。

「不二夫兄さん。ガンモもおいしいわよ」

結局は、自分もこんなことしかいっていないのだと自嘲しながら、弘子は不二夫の皿にガンモを取ってやった。その意味では、人の心に刺さるような栄介の言葉が、一番本当のもののようにも弘子には思われた。

（でも、栄介兄さんには、いくらも弘子には思われた。決して何のプラスにもならないのだわ）

「栄介、そのウイスキーはうまいかい」

本当は、そのウイスキーを飲ませてくれと、洋吉は聞いたかったのだ。

「ああ、うまいですよ」

大学を出て、商事会社につとめてから、もう六年にもなるうというのに、栄介は金輪際人に物をやるとうことを知らない男なのだ。但し人から物をもらうことだけは知っている。

不二夫は、その兄の姿を、少年の頃からよく知ってい

た。例えばこんなことがあった。近所の友だち五、六人と、手稲の山に遊びに行った夏のことだった。不二夫が中学一年、栄介が中学三年の夏休みだった。登山口にかかる前に、栄介はふもとの小さな店で、アンパンを数個買った。山の途中まで登った頃、みんなはひどく腹がすいた。沢水のちよろちよろ流れ落ちる傍で、

「ひと休みしよう」

と栄介がいつて、持っていた紙袋の口をガサガサと音を立ててあけた時、誰もが栄介からパンをもらえるにちがいないと期待した。だが栄介は、誰にもパンをやらすに、一人でうまそうに食べはじめた。誰も弁当を持ってはいない。もともと、手稲の山に登るつもりで家を出たわけではない。遊んでいるうちに、誰いうとなく、近くこの山に登ってみようということになったのだ。

「栄ちゃん、ぼくにもパンをくれなにか」

こらえかねたように、小学五年の子が汗ばんだ手を出した。

「パンをくれて？ どうして？」

「だって、ぼく、おなかペコペコだもん」

暑い日に照らされて、その子は半分ペソをかいていた。

「なんで、ぼくのパンをお前にやらなきゃならないんだ。ぼくはね、このパンを自分の金で買ったんだぜ。金を出すんなら、売ってやってもいいよ」

「じゃ買うよ」

「ぼくも買う」

みんなは口々にいったが、誰も金を持ってはいなかった。

「なあんだ。誰も金を持っていないのか。じゃ、みんな家に帰ったら、二十五円必ず持つてくるんだぞ」

「二十五円!? 栄ちゃん、そのパン十五円で買ったんじゃない?」

先程の五年生の子が、口を尖らせた。

「二十五円出すのがいやなら、やめたらいいよ。十五円で買ったものを、十五円で売ったって、何の得にもならないからね」

紙袋の口を閉じようとする栄介に、少年たちは不承不承、二十五円払う約束をした。

帰りに、栄介は不二夫にいった。

「金はな、こうやってもうけるもんだぞ。需要と供給の原理というのを、学校で習っただろ」

栄介は得意だった。だが不二夫は、兄が哀れだった。僅か五、六十円の金と引換に、兄は友情を失ってしまったのだ。以来不二夫は、手稲の山を見上げる度に、その時のことを思い出さずにはいられなくなった。

「栄介、お前は……」

いいよとんで、洋吉は盃を飲み干し、そしていった。

「お前もそろそろ、嫁をもらわなきゃならないんじゃないぞ」

いかね。もう二十八だろう」

「そうですよ、あなた」

栄介の答える前に、勝江が眉をひそめるようにして、うなずいた。

「ぼくは、結婚なんかしませんよ」

「なぜだね」

黙ってコンニャクを食べている不二夫のほうに、ちらりと視線を投げかけてから、洋吉は栄介を見ずえるように見た。

「お前が結婚しなきゃ、後がつかえるよ」

「不二夫たちが結婚したきゃ、勝手にすればいいんですよ。女なんて、ぼくにいわせると不経済なしろものですよ。一人分の食費で間に合うところが、二人分になる。」

人の出入りも多くなるし、女の親だの兄弟だの、親戚がぞろぞろ出入りされちゃ、無駄金も使いますからね」

「そりゃお前、人間はこの世に一人で生きていけるものじゃないからね」

「だからといって、つきあいたくもない人間と、つきあわされるのはごめんですよ」

「呆れたわ、栄介兄さんったら。じゃ、天涯孤独の女の人と結婚したらいいじゃないの」

栄介は人より少し赤い唇を、べろりとなめて皮肉に笑った。

「弘子、女という奴はね、子供を生むしろものなんだ

よ」

「あたり前じゃないの。いやねえお兄さん」

「いやなのは女だよ。子供なんか生まれてしまえば、いやでも着せなきゃならない。食べさせなきゃならない。おまけに学校にやらなきゃならない」

洋吉と弘子の視線がす早くかち合い、そして離れた。

「だけど兄さん。ぼくらだって、生んでもらって生きているんですからね」

不二夫は、茶色のカーディガンのボタンを外しながら、いつものようにとげのない口調でいった。

「それは別問題さ。とにかく、ぼくにとっては、子供を生んだり、買物好きだったりする女どもは、不経済な存在の一語に尽きるんだ」

「なあるほど。じゃ、お前は何よりも金が大事というわけか」

小さい時から、妻の勝江に輪をかけて、どこか欠落している榮介に、今更何をいっても無駄なことを洋吉は知っていた。

「もちろんですよ、お父さん。金以外に、何が一体信用できるんです？ 金さえ出せば、まちがなくなほしい物が手に入りますよ」

「そうかね、金でほしい物が手に入るかね。わたしはまた、金で買えないものがほしい人間なのでね」

「だけどさお父さん。金で買えないものが、本当に手に

入りましたか。思ったようには入らないでしょう。お父さんのように、いくら愛想をふりまいて生きてきたって、本当の話、三人と心をゆるす友だちがいるか、どうか。仲のいいつもり友人だって、陰でどんなことをいつてるか、わかつたものじゃないでしょう」

「何をくだらないことを、ぐずぐずいつてるんですよ。それより、早くお酒を切り上げて、ごはんにしてくださいよ」

からになった自分の皿を片づけながら、勝江は立ち上った。榮介は無視して、

「ね、お父さん。お父さんは、おじいさん譲りの大きなリンゴ園のおかげで、思わぬ大金がころがりこんだわけですよ。でもその金の使い方を何も知っちゃいない。この百坪の土地に、ちよっとした家を建てただけで、あとは後生大事に不二夫の銀行に預けている。ま、不二夫は勤め先がいい顔ができるだろうが、全く情ない話ですよ。ぼくなら、せめてマンションでも作って、高値で分譲するところがね」

洋吉は鼻先をしきりにこすっている。片手を懐に、榮介はウイスキーを一口飲んで、

「ね、おやじさん。宅地ブームで握った金は、五千万はくだらないでしょう。黙って遊ばせておけば、金の価値は下るばかりですよ。おやじさんが金をうまく働かせてくれたら、その三倍や五倍の金は、ぼくたちに残せるはず

なんですがねえ」

金の話をする時の栄介の目には、どこか残忍な光さえあると、弘子は思った。

「お父さん、お金なんかわたしたちに残すことはないわよ。ね、不二夫兄さん」

「じゃ、ぼくだけが頂くよ、ありがたない」

栄介は、いかにも人を小馬鹿にした顔をした。

「本当に栄介、お前には好きな女のひとがないのかねえ」

話題を変えようとした洋吉に、

「女というものは、遊ぶ対象であつても、好きになる対象じゃありませんよ。ぼくの好きなのは金だけだ」

と、栄介は笑った。

「かわいそうに、栄介兄さんはハートを忘れて生まれてきたのね」

軽蔑をこめた弘子の一言を、栄介は顔色も変えずに受けとめていった。

「ああ、ハートを忘れて生まれてきて、全くしあわせだったよ。くだらぬ女に迷わされるといふことはないからね」

その時、玄関のブザーが鳴った。立ち上って弘子が玄関に出た。ドアをあけると、門灯の下にいた青ざめた女が、脅えたように目を見ひらいて弘子を見た。

「あら……先程の」

二階の窓から見た女だと気づいて、弘子はとっさに言葉が出なかつた。

「あの……わたし、西井紀美子と申しますけど、真木栄介さんのお宅でしようか」

「ええ、栄介はわたしの兄ですけど」

ドアを大きくあけて、玄関の中に招じ入れながら、この女は先程から、もう二時間以上もこの雪の中をうろろろしていたにちがいないと、弘子はその寒そうな女の顔を見やった。

「あの、お目にかかれるでしょうか」

「少々お待ちくださいませ。すぐ兄をよんでまいります」

その、少々お待ちくださいませ、といった自分の言葉の中に、日頃HKS放送局で受付をしている時の職業的な響きはなかつたかと、弘子は相手を思いやるまなざしで、もう一度西井紀美子と名乗る女性を見た。自分と同じく、二十二、三の年頃と思われた。

「栄介兄さん、西井紀美子さんって、若い女のお客さまよ」

栄介の前に立った弘子は、若い女という所に力をこめて取り次いだ。栄介の一字の眉がびくりと動いた。

「西井紀美子？ いないといってほしいな」

「そんな、お兄さん、いるといったのよ」

「いると思つたが、いなかつたということだつてあるだ

ろう。そんなことぐらいうまく応待ができないで、よく放送局の受付が勤まるなあ」

依然として片手を懐手にしたまま、栄介はグラスに口をつけた。

「だってお兄さん。あの方は三時間以上も、入ろうか入るまいかと、この辺をうろろしていたらしいのよ」

一時間多くいって、弘子は西井紀美子のために、栄介の同情を買おうとした。

「おれは、あの女に会いたくないんだ。しつこくつてね。とにかく女というのは、おれは嫌いなんだ」

「嫌いでもなんでもいいわよ。男らしくないわ。お兄さん断わっていらして」

弘子はとても玄関に出て行く気がしなかった。だが栄介は、一向に立とうとはしない。勝江は何も聞かなかつたように、片づけた食器から洗いはじめた。

「まあいい。お前が会いたくないんなら、お父さんが会おう」

洋吉が盃をおいて静かに立ち上った。

栄介はウイスキーのグラスを持ったまま、立ち上った父の洋吉をじろり見上げてから、にやりと笑った。片頬に深いたてじわが彫ったようにくつきりと現われ、それが栄介を妙に凄味のある顔に見せた。

「お父さん、あんたが西井紀美子に会ってどうするんです」

「どうするって栄介、話を聞いてあげるよ」

「ま、おすわんなさい。どうせあの子のいうことはわかってるんです」

「わかつているって、お前……。とにかく話ぐらいい聞いてあげるほうがいいだろう」

おだやかにいって洋吉は、ドアのほうに歩きかけた。「お父さん、紀美子は妊娠三か月なんだ。いや、もう四

か月かな。それで彼女、結婚してくれと、わけのわからぬことをいうにきまってるんですよ」

「何だって!? 妊娠三か月? 本当か、栄介!」

ぎよっとしたようにふり向いた洋吉の顔に狼狽の色があった。

「何をそんなに驚いているんです。ぼくにだって、女の子供を生ますことぐらいいできますよ」

食卓の上を拭いていた弘子の手がとまった。弘子は兄の栄介を見つめた。不二夫は、青ざめた顔で、ソファにすわったまま、兄を見ようとしなかった。

「とにかく、入っていただく。な、栄介」

洋吉は栄介の気持を書ねないように、優しくいった。その父の顔を、眉をひそめた弘子がいらいと見た。

「何も家の中に入れることはありませんよ。ま、仕方がない。ぼくが話をつけますよ」

栄介はグラスに残っていたウイスキーをあおると、相変わらず片手をふところに入れたまま立ち上った。



威嚇するように、乱暴にドアをあけて、栄介は玄関に出て行った。と、たちまち栄介の大きな声が、閉め残したドアの僅かな隙間から聞えてきた。

「何しに来た！」

ハッと弘子は、洋吉を見た。不二夫の傍に腰をおろした洋吉は、しきりに鼻をこすっている。

息をひそめるようにして、弘子は玄関のほうに耳を傾けた。女が何かいう声が、とぎれとぎれに聞えた。

「ふん、……しかしね、誰の子かわかりやしない話だろう。それとも、たしかにぼくの子供だという証拠でもあるのかい」

人を小馬鹿にしたような栄介の言葉に、弘子がたまりかねていった。

「ひどいわ、栄介兄さんったら！ お父さん、お父さんはなぜとなりつけてあげないのよ」

洋吉は聞えないかのように、目を宙にすえたまま返事をしない。

女がまた何かいい、栄介の低くおさえた声かしている。灯の下に誰もがじっと耳をすましているその時、背を向けて食器を拭いていた母親の勝江が、

「よく降る雪だねえ。根雪になるのかしら」

と、窓ガラスに舞う雪を見て、何事もないかのようにのんびりといった。何となく弘子はぞっとして、食卓の前に立ちすくんだ。

ソファの隅に、まるで誰かにおしつけられたようにすわっている不二夫が、悲しそうに、澄んだ目を母に向けてた。

女の声が泣いているように、時々途切れた。ふいに栄介の笑う声があった。栄介が二言三言、何かいった。玄関のドアが開き、そしてしまる気配があった。

栄介がニヤニヤしながら、部屋に戻ってきた。  
「帰ったのか」

洋吉はほっとしたように、栄介を見上げた。

「ああ、帰りましたよ」

栄介は突っ立ったまま、父親を見おろした。

「何といて帰したのかね」

タバコを口にくわえた洋吉に、不二夫がすぐ、テーブルの上のライターを取って近づけた。

「結婚してくれなければ死ぬというから、死にたければ、死んだらいいだろうと、いってやっただけですよ」  
つまらなさそうに栄介はあごをなでた。

「何!? 死ぬって？ 栄介、そんな……お前大変じゃないか」

「なあに、死ぬ死ぬとって、死んだ女はいませんよ。

去年も一人、あんな女がいますね。死ぬというから勝手にしろといったら、やはり死にやしませんでしたよ。

ほかの男とさっさと結婚しましたよ。ま、女なんて、そんなものです」